

中世文書を読む(十)
あしがよしあきこないしよ
足利義昭御内書

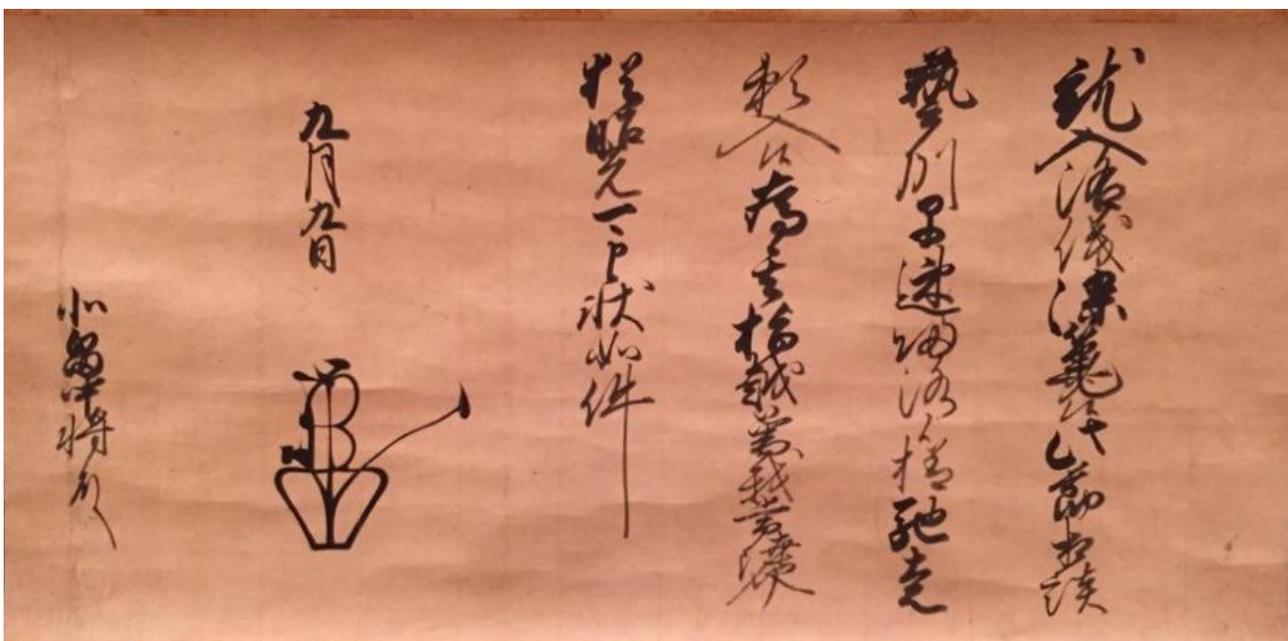


史料1は、室町幕府の最後の将軍、足利義昭が出した「御内書」と呼ばれる文書です。
「中世文書を読む」シリーズの記念すべき10回目の展覧では、普段見慣れない「御内書」の謎に迫ります。

①

また、史料1を「足利義昭の御内書」として紹介しています。
足利義昭の御内書
北畠中將に宛じた文書です。

史料1



「入洛」のことについて(この文書を)したためた。この節

「芸州」と相談し、速やかに「帰洛」できるよう、馳走を

頼む。そのため「曾我常陸介」を派遣した。

なお「昭光」が申すであろう。文書は以上のとおりである。

九月九日

(史料1)
(花押)

北畠中將殿

年	西暦	足利義昭に関すること	その他主な出来事など
天文6	1537	11月3日、12代将軍義隆の次男として誕生。	
天文11	1542	11月20日、興福寺一乗院(奈良県)に入室。	
永祿5	1562	寛慶(義昭)、一乗院門跡となる。	
永祿8	1565	7月、寛慶(義昭)、一乗院から和田城(宮城県)へ脱出。	5月、兄の13代将軍義隆が暗殺される。
永祿9	1566	2月、寛慶(義昭)、僧をやめて義秋と名乗る。	
永祿10	1567	11月、義秋、朝倉氏の一乗谷(福井県)へ移る。	
永祿11	1568	4月、義秋、元服(成人)して義昭と改名する。	2月、いとこの義茶が14代将軍に就任。
		7月、義昭、織田信長の招きで岐阜へ移る。	
		9月、義昭、信長とともに入京。	9月、将軍義茶が崩没。
		10月、義昭、15代将軍に就任。	
元亀元	1570		本願寺(大阪府)が信長と敵対、いわゆる石山合戦が始まる。
元亀4	1573	2月、義昭、信長に対し挙兵。	(いわゆる室町幕府の滅亡)
		7月、義昭、京都から若江城(大阪府)へ移る。	8月、浅井氏・朝倉氏の滅亡。
天正元		11月、義昭、由良(和歌山県)へ移る。	
天正4	1576	2月、義昭、由良から新(福山市)へ移る。	
天正6	1578		3月、上杉謙信死去。
天正7	1579		備前(岡山県)の宇喜多氏、伯耆(鳥取県)の南条氏が信長の味方となる。
天正8	1579		本願寺、信長と講和(石山合戦終結)
天正9	1581		10月、鳥取城(鳥取県)が落城。
天正10	1582		6月、本能寺の変で信長自害。
天正15	1587	10月頃、義昭、大坂へ移る。	
天正16	1588	義昭、出家。	
天正18	1590		小田原の北条氏の滅亡。秀吉の天下統一。
文祿元	1592	義昭、文祿の役で名護屋城(佐賀県)へ赴く。	
慶長2	1597	8月、義昭死去。	

② 義昭は、永祿11年(1568)に織田信長とともに上洛し、征夷大将軍になります。その後信長と対立し、元亀4年(1573)に京都から追放され、11月に紀伊国田原(和歌山県田原町)の興国寺に移ります。そして、天正4年(1576)2月、突然、備後国鞆の浦(福山市)にやってくるのです。

義昭は、諸国へ御内書を遣わすまわり、「帰洛」への協力を求めます。史料1の御内書もその一環と思われる「帰洛」のために相談する「芸州」とは、戦国大名毛利輝元と考えられます。

義昭のプロフィールは、隣の表をチェック!



⑤ 「曾我常陸介」の実名は、晴助といえます。将軍義昭の使者として伊予国(愛媛県)の河野氏(播磨国(兵庫県)の黒田氏、毛利両川の吉川元春・小早川隆景)などへ派遣されました。「昭光」は、将軍義昭の側近に仕えた真木嶋昭光のことです。二人とも、他の義昭家臣とともに鞆の浦へ来住しました。

北畠氏は、伊勢国司を世襲する村上源氏。この頃「北畠中將」を名乗る人物には、具房と、その養子となった信雄がいます。

このうち、信雄は美の織田信長の次男。信長に敗れた北畠氏は、「信雄が元服(成人)したら家督を継ぐ」という講和の条件を受け入れるしかありませんでした。信長が京都を追放された足利義昭が、信長の次男の信雄に対し「帰洛」の尽力を依頼することは考えられません。

よって、北畠中將は具房と思われる。



③ 「曾我常陸介」って、誰?

④ 宛名の「北畠中將」って、誰?

⑥ 何?

⑦ ところで、御内書って、何?



⑦ 御内書は、室町幕府将軍が出した文書。月日だけ記し、年を書かないものは書状(手紙)と同じです。

でも、将軍の文書となると、指令や権利付与など公的な内容を持つていました。

足利義昭の御内書を、刊行されている史料集の中に捜したところ、312通が見つかりました。

次の四つのタイプがあることに気付いたんじゃないかと、違いが分かる。



⑥ 何?

⑦ ところで、御内書って、何?



タイプ	A	B	C	D
御内書の例	わざわざ筆をとった。当所に永々と逗留しているが、あまりに窮屈だ。そこで津郷(福山市津之郷町)がよいところと聞いたので、移りたい。きつと毛利輝元に対して意見し、(希望がかなうように)頼むぞ。そのため曾我晴助を派遣した。よつて歎(しりがい)※を十個遣わす。なお(詳しくは)真本嶋昭光が申すべく候也。 八月十五日 (花押) 吉川駿河守とのへ (吉川家文書五〇一) (※ 馬具の一種)	年始のお祝いに、太刀一腰、馬一疋が届いた。すばらしい。なお(詳しくは)真本嶋昭光が申すであろう。如件(御内書は以上のとおりである)。 正月六日 (花押) 羽柴侍従殿 (吉川家文書七三〇)	その後、久しく無沙汰をしたが、本意ではない。ところで、病氣とうかがった。とても心もとない。そこで、太閤秀吉から、帰朝せよとの仰せとのこと。まことに長々(朝鮮半島に)在陣し、氣疲れゆえのことだから、油断なく早々に帰国して、養生しなさい。詳しくは真本嶋昭光と柳次元政方から申すであろう。かしく。 岡九月九日 (花押) 羽柴小早川侍従殿 (小早川隆景) (小早川家文書二〇七)	(豊後国の大友氏と安芸国の毛利氏との休戦・講和について)特に吉川元春(が毛利元就・輝元と相談して必ず奪走すると)の存分を承りました。神妙なことです。いよいよそのように計らうことが肝要であると仰せになつて下さい。なお(詳しくは)兩人(一色藤長と上野信忠)が申します。恐々謹言(おそれながら謹んで申し上げます)。 三月廿三日 義昭(花押) 聖護院殿 (吉川家文書四七四)
書き止め	候也	候也、 (状)如件	候也、 かしく	候也、 恐々謹言
宛先の敬称	とのへ	殿	殿	殿
見つけた御内書数	302	2	5	3
割合	96.8%	0.6%	1.6%	1.0%

タイプ別の足利義昭御内書

⑨

御名答！
その他、
タイプDは「義昭(花押)」と「SS」です。
名前と花押を記しているタイプA・B・Cは、花押のみで、
名前を書いていないよ。



⑧

宛名に付いている敬称も、「とのへ」と「殿」と、違つわね！



⑧

まず、本文の文末(書き止め文言)が、「候也」「如件」「かしく」「恐々謹言」と、四タイプ全部違つよ！





今では、手紙を書くと、
 名字だけ書くよりも、
 氏名をきちんと書く方が丁寧だね。
 差出者の花押だけの文書よりも、
 名前に花押が据えてある方が
 丁寧なんじゃないの？



いいですね、気が付いたね！
 宛書の敬称も、「上の」より、
 「殿」の方が丁寧です。
 書き止めも、「候也」で本文が終わるより、
 「如件」「かくへ」が付いた方が
 相手を敬っています。
 「恐々謹言」は
 「恐ろしくなから申上げます」「ひどいよ。
 」「」「」と、将軍の御内書と違って
 形式は書状と変わらなごね。



そうですね、
 タイプAよりタイプB、
 タイプBよりタイプC、
 タイプCよりタイプDの方が、
 丁寧で、
 宛名の人を敬っているように感じます？



そうですねー！
 室町幕府将軍ですから、
 御内書を送る相手は圧倒的に
 自分より下位の人物です。
 なので、
 今回見つけた御内書の数も
 タイプAが圧倒的で、
 約97%を占めます。



そうですねー。
 そうですね、
 史料1の御内書は、タイプBなので、
 他に、この表の例にある1例しかない、
 希少なもののですねー！



その希少なタイプBの宛名の人物が、
 「北畠中將」です。
 北畠氏は村上源氏の出身(◎参照)。
 足利義昭が永禄11年(1570)に
 従四位下・征夷大將軍になったとき、
 北畠氏の当主は貞房の父の具教で、
 当時、具教は正三位・前権中納言でした。
 將軍義昭よりも上位にいたんです。
 このように、高い地位にあった
 北畠氏だったからこそ、
 義昭は、タイプBの御内書を送ったのです。